

読書は人を作り、会議は覚悟を作る

（白玲瓏 95号 巻頭言より H29・3・1 発行）

初めての町を歩くのが好きだ。あそこまで歩いてみよう、次はあそこまで。あの角を曲がったら、きっと何かすごいことが待っているかもしれない、そんな思いがいつまでも私を歩かせる。

今思うと数学の勉強もそうだった。なぜ、この定理が生まれてきたのか、発展したその先には何があるのか。ある定理について、その原形や発展形に出会ったりすると実に面白く、また、深いなあと感じ入ったりしたものだ。そしてもっとその先を知りたくなる。

せっかくここまで学んだのだから、もう少しその先まで調べてみよう。こうした思いはほとんどの人が持っていると思う。このような知の連鎖を人は常に求めているのかもしれない。

その先はどうなっているのだろうか、考えているものがある。それは、「読書は人を作る」だ。これはこれで名言だが、あまりにも短い。この部分が強烈過ぎて、他のくだりが消えてしまった。そんな気がするのだ。そこで、その消えてしまった部分を自分なりに修復してみた。それがこれである。

「読書は人を作り、会議は覚悟を作る」

読むことは学ぶことと同様、インプット。人間の一生は短い。実際に体験する量、自分一人の力で獲得する知識の量は限られている。そこで、できない分を読書でカバーする、インプットする。こうして、読書によって人は作られるのである。

これに対して、会議は、アウトプットの間である。会議とは、ある目的のために人が集まり、意見交換し、知を戦わせ、協働して解決を図る場である。そこでは、相手の考えを理解し、自分の考えを述べ、熟考し、決断しなければならない。会議では、主体的な自分が強く求められており、それに応えるべく、覚悟を決め、自分の立場を明らかにしながら意見を話すのである。こうして覚悟は作られていく。

会議にかかわらず、生きることは選択すること。私たちはいつもいくつかの選択肢の中から一つだけ選んで生活している。その選択一つ一つに実は覚悟が必要なのだ。常に覚悟を持って行動することが肝要だ。その象徴として、「会議は覚悟を作る」という一文を修復してみた次第。アウトプットとインプットが絡み合い、交互に作用し合うことで人は成長していく。生きる力が身に付いていくのではないかと考えたのである。

今、主体的な学びが望まれている。学校教育法(第30条)に示されているし、アクティブラーニングを通して「主体的な学び」の実現を目指していることからそれが分かる。

主体性はすべての能力を発揮させるためのエンジンである。予測困難な社会を生き抜いていく子ども達の教育は、まずこの主体性を引き出すことから始めなければならない。それには、自分たちが勉強している内容がどのように社会と接点を持ち、将来につながっているのかを実感させることや授業の中で人生や社会について考えさせることが大切であろう。また、主体的な行いによって生じた失敗、覚悟のある失敗からは多くのことを学ぶものである。そして、自ら学びに向かう大切さと社会の広がり、自分に必要な学びに気づくことになる。覚悟のあるものは強い。覚悟とは、主体的のその先にあるものであり、物事の達成のためには欠かせないものである。そしてそこには、人間力が顕現している。

折しも、PISA2015 調査では、読解力の低下に加え、科学に対する関心や意欲が依然として低く、学習が将来の仕事に役立つと思っていないという傾向がわかった。改善するには、言語活動を充実させること、学習への関心や意欲を高め、主体的に覚悟を持って向き合わせる事が欠かせないといわれている。まさに、「読書は人を作り、会議は覚悟を作る」である。情報化やグローバル化といった社会的変化が人間の予測を超えて進展するようなこれからの時代を生き抜いていく生徒諸君には、この言葉を大事にして生きていってほしいと強く思うのである。

(完)

#### 【補足】

最終稿を見送り、後は印刷されて出来上がるのを待つばかりのところ、ショッキングな事実を知ってしまった。次をお読み頂きたい。

《 英国の哲学者・政治家フランシス・ベーコンの「随想録」(岩波文庫 神吉三郎訳)の中の「学問について」の中に、次のような記述があります。

「読書は充実した人間を作り、談話は機転のきく人間を作り、筆記は正確な人間を作る。」

また、G.キングスレイ・ウォードの「ビジネスマンの父より息子への30通の手紙」(新潮文庫 城山三郎訳)の中には、

「読むことは人を豊かにし、話し合うことは人を機敏にし、書くことは人を確かにする」とありました。さらに、ネットで検索してみたら、次のようなものも見つかりました。

「読書は充実した人間を作り、会議は覚悟のできた人間を作り、書くことは正確な人間を作る。」 》  
浅学を恥じ入るばかり。